

日本のバスケットボール競技における
ゾーンディフェンスの導入過程に関する史的研究
— Franklin H. Brownが紹介した3-2ゾーンディフェンスに着目して —

小谷 究 (日本体育大学)

A Historical Study on the Introduction of Zone Defense
into Basketball Game in Japan
— Focusing on the 3-2 Zone Defense Introduced by Franklin H. Brown —

KOTANI Kiwamu (Nippon Sport Science University)

Abstract

The objects of this study were to clarify the circumstances that introduced 3-2 Zone Defense, the positioning of 3-2 Zone Defense, and the factors that demonstrated the effectiveness of 3-2 Zone Defense in Japan.

The results of the study are summarized below.

1. Before the introduction of 3-2 Zone Defense in Japan, the role of each position was distinctly divided. Up to four players were deployed for offence, and the defense tactic used against this was Man-to-Man Defense. In this defense, the number of defensive players was fixed to correspond to the number of offensive players on the opposing team, and it appears that the defense was performed by 4 players or less.
2. In 1924, Franklin H. Brown, who was invited by Waseda University as a coach to strengthen their team, was the person who introduced 3-2 Zone Defense. The 3-2 Zone Defense was the first 5-player defensive tactic used in Japan, and it was therefore dubbed the "Five Men Defense". The 3-2 Zone Defense was the only 5-person defensive tactic in Japan until the adoption of the Five-man Two-line Defense.
3. This 5-player 3-2 Zone Defense proved highly effective, unlike the 4-player defense utilized in Japan until then; it was possible to cover the space under the basket. Additionally, these 3-2 Zone Defense functioned as an effective tactic because the basketball courts in Japan of the day were narrow and slippery, and the layout of the court at the Tokyo YMCA, where many conferences were held, did not allow for a corner shot.

問題の所在

バスケットボール競技¹⁾の戦術²⁾について、第18回オリンピック競技大会(東京)で全日本男子チーム監督を務めた吉井四郎は、戦術の発達段階は「いかなる攻撃法に対してどのような防御法が効果的であるか、またどのような防御法に対してはいかなる攻撃法が強いかを端的に示している」³⁾と述べ、オフェンスとディフェンスとの相関関係の中で、より高度な戦術が編み出されてきたことを示唆している。つまり、バスケットボール競技における戦術を歴史的に考察する際、オフェンスとディフェンスとの攻防の中で戦術の展開を跡付けることは、大変重要な視点であるといえる。このような視点のもと、谷釜はバスケットボール競技における戦術史研究の今日的意義について、「バスケットボールの攻防の戦術史を時間軸に乗せて解き明かしていったとき、それはゲームで成功を収めるための価値ある情報となる」⁴⁾と述べている。

そこで、バスケットボール競技における戦術の変遷に目を向けると、1891(明治24)年にアメリカでバスケットボール競技が誕生し、その後1910年代にはアメリカ国内の試合でゾーンディフェンスが行われるようになった⁵⁾。アメリカで登場したゾーンディフェンスは、日本YMCA同盟の体育事業専門主事の派遣要請に応え、アメリカから来日したFranklin H. Brown(以下、F.H.ブラウンと略す)により⁶⁾、1920年代前半に3-2ゾーンディフェンス(以下、3-2ゾーンと略す)として日本にも紹介された⁷⁾。それまでに、日本ではゾーンディフェンスについて本などによって一通りの知識を得ることができたが、実際にプレイすることも、プレイを見ることもなかった当時としては、F.H.ブラウンによる3-2ゾーンの紹介は画期的なことであった⁸⁾。

日本におけるバスケットボール競技の戦術の変遷についてはこれまで、牧山⁹⁾がゾーンディフェンスについて取り上げており、昭和のはじめに早稲田大学(以下、早大と略す)や立教大学(以

下、立大と略す)がゾーンディフェンスを用いて好成績をあげた要因について指摘している。しかしここでは、ゾーンディフェンス導入の経緯やF.H.ブラウンが紹介した3-2ゾーンの実際については触れられていない。また、笈田¹⁰⁾が日本におけるバスケットボール競技の変遷をまとめた論文の中にも、ゾーンディフェンスについての記述がみられるが、そこでは日本にゾーンディフェンスが紹介されたことに触れているのみで、その展開過程について詳細な分析が行われているとはいえない。一方、バスケットボール競技のゾーンディフェンスについて戦術史の視点から取り組まれた貴重な研究として、大川¹¹⁾の研究をあげることができる。この研究はアメリカにおけるバスケットボール競技のゾーンディフェンス誕生までの経緯について分析したもので、バスケットボール競技が創案された当初行われていたマンツーマン・プレス・ディフェンスからゾーンディフェンスへの変容過程を明らかにしている¹²⁾。しかしながらこの研究はアメリカ国内における戦術を対象としたものであり、日本におけるバスケットボール競技のゾーンディフェンスについては扱っていない。以上のように、日本におけるバスケットボール競技のゾーンディフェンスについて、歴史研究の視点から詳細に検討したものは管見ながら見あたらない。

そこで本研究では、F.H.ブラウンによる3-2ゾーン導入以前の戦術を概観した後、日本における3-2ゾーン導入の経緯、3-2ゾーンの位置付け、さらには日本において3-2ゾーンが有効性を発揮した要因を明らかにすることを目的とする。

なお、本文中の引用文における漢字、仮名づかい、送りがなは、原則的に原文のままとしたが、原文の誤表記が疑われる表現については(ママ)の表記を付し、文献のタイトルの漢字は、常用漢字に改めた。また、引用文中の漢数字は算用数字に変換し、フィートで記されている長さは1フィートを30.48cmに換算し、小数点以下を切り捨て、括弧をつけて記した。

I. 3-2ゾーンディフェンス導入以前の戦術

1. 4人でのオフense

3-2ゾーン導入以前の日本のバスケットボール競技において、コートの中ではいかなる戦術が展開されていたのであろうか。当時のオフenseについて検討するためには、まず当時のバスケットボール競技における各ポジションの役割について理解しなければならない。

1922（大正11）年頃のポジションの内訳はフォワード2人、ガード2人、センター1人であり¹³⁾、各ポジションの人数は現在でも変わっていない¹⁴⁾。しかし各ポジションの役割をみると、この頃は、各ポジションの役割が現在より明確に区別されていた。1922（大正11）年発行の国内スポーツ雑誌「ATHLETICS」には、各ポジションの役割について次のように記述されている¹⁵⁾。

センターは、中堅にあつて最初競技が開始された時に、ボールを味方の有利な處に打ち遣り、或時は攻撃となり、或時は守備に轉じ、不斷にコート内に大活躍を演じなくてはならぬ・・・中略・・・味方のセンターから見て、右の方のフォアウオード(ママ)を、ライトフォアウオード(ママ)と謂ひ、左の方を、レフトフォアウオード(ママ)と謂ふ。何れもボールを相手方のゴールに、投げ入れて得点を占める役目である、止を得ない場合の外、守備の役を爲す事がない・・・中略・・・専ら相手方の攻撃を防禦する地味な役割である、ガードの役は・・・中略・・・相手方のフォアウオード(ママ)の活動を正當に阻止し、己が受持の相手方のフォアウオード(ママ)には1點のゴールの得點も與へない覺悟で活動せねばならぬ

このように、当時の各ポジションの役割は主に、ガードがディフェンス、フォワードがオフense、センターはその両方とされた¹⁶⁾。

そのうえで状況に応じて、2人のガードのうち1人はオフenseにも参加した。1922（大正11）年発行の「ATHLETICS」ではガードの役割として「隙あらば相手方のゴールに肉迫して、味方のフォアウオード(ママ)の活動を補助」¹⁷⁾することをあげており、1926（大正15）年および1929（昭和4）年発行の指導書においてもそれぞれ「ガードは専心防禦するばかりでなく、状況により機會あらば躍り出て、シュートを行ふべきである」¹⁸⁾、「ガードは退いて守ることのみならず、進んで攻撃をしなくてはならぬ」¹⁹⁾とされている。実際に1925（大正14）年に開催された第2回明治神宮競技大会の報告書では、浦和高等学校と松本高等学校の対戦について「ガード鈴木も盛んに隈部をマークすると共に、駿馬の出足を利して深く味方陣地へボールを運んで攻撃に加はり、フォアウオード(ママ)遠藤の活躍を助け、じりじりと得点を恢復して、後半戦を終る」²⁰⁾との記述があり、「特筆すべきは新中ガード山田が前半5ゴール（10點）後半2ゴール（4點）合計14點を得て居る事」²¹⁾との記述もみられる。また1926（大正15）年発行の『バスケットボール』においても「東京Y・M・C・Aチームや早大チーム、立教大學チーム、東京商科大學チーム等に於てもガードが突進してゴール・シュートをなしガードの得点が仲々多くなつて來た」²²⁾とガードのオフense参加の様子が報告されている。

このように、状況によってガードがオフenseに参加することもあったが、あくまでもそれは2人のガードのうち1人に限られていた。1923（大正12）年発行の「ATHLETICS」では「ガードが2人共防禦を御留守にして味方のバスケットの側に飛んで行くやうな事があるが、此様な事は絶対に行つてはならぬ。1人は行つても他の1人は必ず相手方のゴールを守つて居ねばならない」²³⁾とされている。同時期に発行された指導書でも、「2人のガードが同時にすることは絶対に許されない」²⁴⁾、「フォアウオード(ママ)が前進した時は、1人のガードが残つて他は全部攻撃に向ひ、而もフォアウオード(ママ)とガードとの連絡を失

はないやうにする」²⁵⁾と記述された²⁶⁾。

以上のように3-2ゾーン導入以前の日本のバスケットボール競技では、ガード2人のうち1人はオフェンス時も常に自陣に残り、オフェンスは最大でも4人のプレイヤーによって展開された。

2. 4人でのディフェンス

4人でのオフェンスが行われていた日本のバスケットボール競技において、それに対抗するディフェンスでは、どのような戦術が用いられていたのだろうか。1932(昭和7)年発行のバスケットボール競技専門雑誌「籠球」では、1917(大正6)年から1923(大正12)年頃の日本バスケットボール競技界を「マンツーマンの時代」²⁷⁾としている。大日本バスケットボール協会の設立に尽力し、設立後は協会の理事としてバスケットボール競技のルールの設定や技術の研究普及等に努めた²⁸⁾李想白も当時のディフェンスについて「各人マークの防禦法」²⁹⁾であったとしている。さらに、1926(大正15)年発行の「運動界」で早大OBの鈴木重武もまた、マンツーマンディフェンスは「従来最も廣く、殆ど獨專的に行はれ來つた戦法である」³⁰⁾と述べている。これらの記述から、3-2ゾーン導入以前に日本で使用されていたディフェンス戦術は、マンツーマンディフェンスが主流であったと推察される。

ところが3-2ゾーン導入以前に用いられていたマンツーマンディフェンスは、今日のバスケットボール競技で見られるようなものとは異なっていた。上述したように、当時の各ポジションの役割は主に、ガードがディフェンス、フォワードがオフェンス、センターはその両方と、各ポジションの役割が明確に区別されていた。そのため、主にディフェンスを行っていたのは、センターとガードの3人であった。しかし、状況に応じて2人のガードのうち1人はオフェンスにも参加した。その場合、ディフェンス側はフォワード1人がディフェンスに参加することで対応した。1926(大正15)年発行の『バスケットボール』では以下のように記述されている³¹⁾。

相手方が2人のフォワードとセンターの3人で攻めて来る時は味方も2人のガードとセンターとで守備する事も出来るが、進んだチームになるとガードが不意に突進して攻撃するから、此の場合には其のガードについてゐた味方のフォワードはそれを逸する事なく、追及して之を壓迫せねばならん。

1926(大正15)年発行の『最も要領を得たるバスケットボールの階段的指導法と最新規則の解説』では、3-2ゾーン導入以前のディフェンスについて「味方のガードプレイヤー(ママ)と、フォワード(ママ)の1人と、センタープレイヤー(ママ)とで4人によつて守備をした」³²⁾としている。このように、当時は主に4人でのオフェンスに対して、4人でのディフェンスが行われていたと理解できる³³⁾。

II. 日本へのゾーンディフェンスの紹介

1. 早稲田大学によるF.H.ブラウンの招聘

1923(大正12)年頃の日本のバスケットボール競技界について、李は以下のように述べている³⁴⁾。

大正56年頃(ママ)から12年邊りまで斯界に獨歩の地位を保有し、永い間、世俗の無理解にも屈せずよく此競技の生命を保育養護してくれた東京YMCAのチームは、關東大震災によつてその王座たる同會體育館が崩壊すると共に分散して昔日の面影を残さなくなり、それに數名の部員を有してゐた立教大學は東京YMの時代に代る立大の黄金時代を現出せしめました

このように、1923(大正12)年の關東大震災によって東京YMCAのチームが解散すると、日本のバスケットボール競技界は立大の黄金時代を迎えた。1924(大正13)年ごろの立大の圧倒的な強さについて、東京商科大学(以下、商大と略す)OBである田中寛次郎は、「早大は破る事が出来ても、立大だけはどうにも手に負へなかつた」³⁵⁾と

表現している。このように当時最強を誇っていた立大に対し、早大もまた手に負えない状態であった。李は1924（大正13）年当時のことを次のように記述している³⁶⁾。

第1回のインターカレッジリーグゲームでも立教は依然強く同年末までの成績は立大4勝、商大2勝、早大4敗でありました。此時我々早大のものは此苦境を脱しやうとして随分苦惱したことを今尚ほ覚えてゐます。

この時期、早大が最下位の状況を脱したかった背景には、大学の事情があったといえよう。早大OBである富田毅郎は当時の早大における大学側の運動部に対する理解について、次のように回顧している³⁷⁾。

私が早稲田に入った時分は、運動部全盛であらゆる運動部が強くてね。新しい部ができて、それを認めてくれないわけです。学校自体は運動に対して理解はあるが、生まれたばかりの部を、補助金を出して正式な部として認めることができなかつたんですね。

また別の史料で富田は、「当時の早稲田大学体育会には一種の不文律がありまして、それは『優勝しなければ体育会に加盟を認めない』という厳しいものでした³⁸⁾」と振り返っている。すなわち当時、早大では学生による運動部活動が盛んに行われていたが、大会に優勝しなければ体育会に加盟できず、正式な部として認められていない部は補助金を受けることができなかつたのである。

そこで早大がチームの強化を図り、コーチとして目をつけたのが東京YMCA体育部名誉主事を務めていたF.H.ブラウン³⁹⁾であった。F.H.ブラウンは、1917（大正6）年から1923（大正12）年の関東大震災まで東京YMCAを指導していた。F.H.ブラウンの指導した東京YMCAは、1918（大正7）年開催のYMCA第1回体育部大会に優勝すると⁴⁰⁾、1921（大正10）年開催の第1回

全日本選手権大会から1923（大正12）年開催の第3回大会において3連覇を成し遂げた⁴¹⁾。さらに、東京YMCAは1921（大正10）年開催の第5回極東選手権競技大会（以下、極東大会と略す）と1923（大正12）年開催の第6回大会に日本代表として出場した⁴²⁾。このように、F.H.ブラウンの指導した東京YMCAが優れた結果を残したことから、早大OBである李は「大正6年東京に於いて、基督教青年会の體育館の竣工をみるに及んで、此設備の充實とブラウン氏の指導宜しきを得て、爾後大正12年関東大震災に至る迄の間、實に東京Y・M・C・A・チームの、黄金時代、否獨歩の時代を現出したと云つてよいものがあつた⁴³⁾」と述べており、さらにF.H.ブラウンのことを「日本に於ける最も優れた指導者の一人⁴⁴⁾」と評している。

このように、F.H.ブラウンの指導力を高く評価し「13年秋の初めに日本籠球界の恩人F・H、ブラウン氏を聘し⁴⁵⁾」早大はチームの強化を図つたのであった。

2. F.H.ブラウンによる5人でのディフェンスの導入

早大バスケットボール部のコーチに就任したF.H.ブラウンは、それまで日本で見ることのなかつた戦術を早大に紹介した。それは5人全員がディフェンスに参加するものであった。

早大OBである浅野延秋は、F.H.ブラウンをコーチとして招聘し「日本で初めてファイブメン・デフェンス（ママ）の新戦法を研究⁴⁶⁾」したとしている⁴⁷⁾。F.H.ブラウンの指導によって初めて5人のプレイヤーによるディフェンスを実践した早大は、第1回3大学リーグ戦において「初めてファイブメン・ディフェンスを採用し、多少の効果を実現した⁴⁸⁾」ことで、ついに多年の宿望であった立大を破るに至つた⁴⁹⁾。

1925（大正14）年に開催された第2回明治神宮競技大会では、早大が5人によるディフェンスを展開し、見事に優勝を勝ちとつた⁵⁰⁾。当時の資料を紐解くと、大日本体育協会の総務主事を務

めた⁵¹⁾ 薬師寺尊正は、1925（大正14）年発行の「ATHLETICS」で第2回明治神宮競技大会東京府（関東第1区）男子籠球予選概況として「早大ファイブメンディフェンスの鉄桶の守備牢として抜き難く⁵²⁾」という記述を残している。また、第2回明治神宮競技大会での早大については、1925（大正14）年発行の「運動界」で「独特のファイブメンデフェンス（ママ）（5人の守備）が益堂に入り完璧に近く近頃では之れを完全に破り得るものはない位にまでなつた⁵³⁾」とされ、その後も「早大の水も漏さぬ全員防禦の鉄壁を破り得ず⁵⁴⁾」、「蟻の這ひ込む隙をも與へざる早軍のファイブ・メン・デフェンス（ママ）は容易に抜き事能はず⁵⁵⁾」と評されたように、早大の快進撃の要因として、5人によるディフェンスが大きな効果を発揮した。

結果として、早大は「14年の秋商大に1敗する迄連勝36回の黄金時代を形成するに至つた⁵⁶⁾」。そして1926（大正15）年発行の『バスケットボール』で「最近はや大チームの之（5人でのディフェンス—引用者注）に倣つて種々のチームが此の方法を取つてゐる⁵⁷⁾」と紹介されるほど、その後は国内の多くのチームが5人でのディフェンスの効果を認め、採用するようになった。

3. F.H.ブラウンが導入した3-2ゾーンディフェンス

それでは、F.H.ブラウンが紹介した5人でのディフェンスとは、具体的にはどのようなものであったのだろうか。1932（昭和7）年発行の「ATHLETICS」における浅野の以下の記述から、F.H.ブラウンが紹介した5人でのディフェンスは、ツーラインの隊形をとるゾーンディフェンスであったことがわかる⁵⁸⁾。

立大の全盛を奪ふべく早大が苦心して先づ輸入した新研究は所謂地域防禦といふツーラインのゾーンデフェンス（ママ）であつて、早大の覇が確立するに及んで大正14年秋から此の戦法が非常な勢で全国に喧傳されたものであ

る。

さらに、早大OBである富田は、F.H.ブラウンから「ガード・ゾーンにボールが入れられたときは、ガードがそれをチェックし、そのかわりフォワードが少し下がって応援してやる。反対側のガードは真ん中の方に動く⁵⁹⁾」と指導されたと回顧している。したがってF.H.ブラウンが紹介したツーラインのゾーンディフェンスには、ガードの両サイドのコーナーを守るためにフォワードがカバーする、3-2ゾーンの特徴が表れている⁶⁰⁾。

したがって、F.H.ブラウンが紹介した5人でのディフェンスは3-2ゾーンであったと推察される。

4. 3-2ゾーンディフェンスの位置付け

上述したように3-2ゾーン導入以前の日本で用いられたマンツーマンディフェンスでは、実際にディフェンスを行っていたのは最大でも4人であった。そこへ、F.H.ブラウンによって3-2ゾーンが日本に紹介されたのであった。これに対しアメリカでは、5人のプレイヤーによるファイブマン・ワンライン・ディフェンスやファイブマン・ツーライン・ディフェンスを経て3-2ゾーンが誕生している⁶¹⁾。

ファイブマン・ワンライン・ディフェンスは、1926（大正15）年発行の『バスケットボール』をはじめさまざまな指導書や雑誌によって日本に紹介されている⁶²⁾。これ以外にも、薬師寺は5人が縦2列に分かれて並ぶディフェンスを紹介し⁶³⁾、鈴木は5人によるさまざまな隊形のディフェンスを紹介している⁶⁴⁾。しかし、当時のバスケットボール競技に関する指導書や雑誌⁶⁵⁾では、実際に日本においてこれらのディフェンス戦術が採用されたという記述は見当たらない。したがって、ワンラインディフェンスや5人が縦2列に分かれて並ぶディフェンスなどは、日本で定着しなかったと考えられる。

また、ファイブマン・ツーライン・ディフェンスは、日本では3-2ゾーン導入後に採用されるよ

うになった。日本におけるディフェンス戦術の導入について李は以下のように述べている⁶⁶⁾。

今日何處のチームでも例外なく採用しある所謂ファイブメン・ディフェンスは前に述べたやうに早大チームが當時の餘りの苦境を脱しやうとして始めたものです。然し早大の初めたのはゾーン・システムであつたが、その後商大ではミーンウエルの所謂エヴエリマン・ヴァリエーション(ママ)の5人制(ファイブマン・ツーライン・ディフェンス—引用者注)を採つて非常に良好な成績をあげました。

実際にファイブマン・ツーライン・ディフェンスは、F.H.ブラウンによる3-2ゾーンの紹介以降の指導書や雑誌において紹介されるようになった⁶⁷⁾。つまり、アメリカにおいてファイブマン・ツーライン・ディフェンスを経て誕生した3-2ゾーン

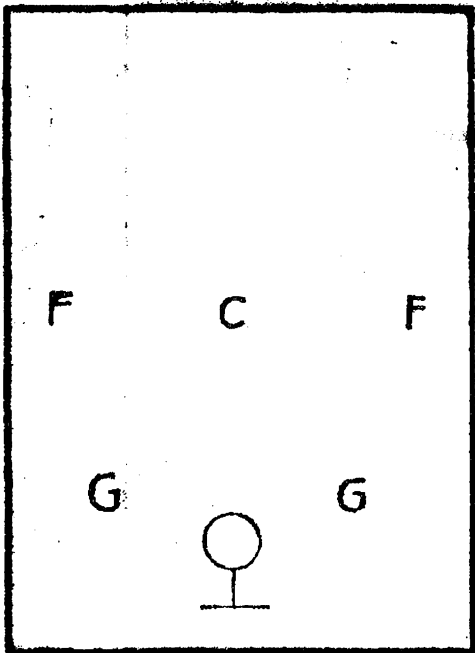


図1 3-2ゾーンディフェンス
(外山慎作：『バスケットボール法大要』，
外山慎作，1926，p.55)

は、日本ではファイブマン・ツーライン・ディフェンスに先行して導入されていったのである。

1926(大正15)年発行の『バスケットボール法大要』では、「最も有効とせられてゐるものは總員の防禦即ちファイブメン、デフィン(ママ)である」⁶⁸⁾として、図1とともに「ファイブメン、デフィン(ママ)」⁶⁹⁾について以下のように説明している⁷⁰⁾。

センターを中心に2人のフォワード(ママ)はコート中央邊に並び他の2人のガードは後方に陣取つて敵の第1戦突破に備へてゐる。そして不幸にして第1線破れた場合には直ちにバックして第2線のガードを援助するものである。

このほかにも、1926(大正15)年発行の『最も要領を得たるバスケットボールの階段的指導法と最新規則の解説』においても3-2ゾーンは「ファイブ、メン、デフェンス(ママ)」と紹介されている⁷¹⁾。また、ファイブマン・ツーライン・ディフェンスは当初「ファイブメン・ツーラインのシステムにエヴリマン・マーク(マンツーマンディフェンス—引用者注)を加味したるもの」⁷²⁾とよばれた。

このように、日本では3-2ゾーン導入以前に5人全員が参加するディフェンス戦術の採用が認められないことから、ファイブマン・ツーライン・ディフェンスが採用されるようになるまで3-2ゾーンは、日本において唯一の5人のプレイヤーによって行われるディフェンス戦術であった。そのため、3-2ゾーンはファイブマン・ツーライン・ディフェンスが採用されるようになるまで「ファイブメン・ディフェンス」とよばれた。

Ⅲ. 3-2ゾーンディフェンスが有効性を発揮した要因

1. 5人でのスペースの占有による有効性

F.H.ブラウンが紹介した3-2ゾーンは、試合の場面においていかに有効に機能したのであろう

か。

前述したように、5人で守る3-2ゾーンが登場する以前、日本では4人でのオフenseに対して4人でのディフェンスを行っていた。それに対し、5人のプレイヤーがバックコートにおいてディフェンス陣形を組む3-2ゾーンは、ゴール下のスペースを埋めることでオフenseプレイヤーの自由を奪うことができた。

ケンタッキー大学のコーチであり、第14回オリンピック競技大会（ロンドン）でアメリカ代表チームのアシスタントコーチを務めた⁷³⁾ アドルフF.ラップは、ディフェンスの7原則の一つとして「バスケットから18フィート（約5～6m（ママ））以内のエリアでプレーさせない⁷⁴⁾」ことをあげ、以下のように述べている⁷⁵⁾。

もし、バスケットから18フィート（約5.5m（ママ））の地点に円を描き、その内側の地域のオフenseの動きをすべて封じることができたら、リバウンドはすべて確保できるし、きわめて楽なディフェンスが可能だろう。実際には不可能であることはわかっている。しかし、それでもバスケットの近くでショットさせてはならないという考えは正しいはずである。

このように今日においても、ディフェンスプレイヤーがゴール周辺のスペースを埋め、オフenseプレイヤーに自由にプレイさせないことは、勝つために重要な要素とされている。ゴール周辺のスペースを埋めるのに4人と5人とではどちらが有効かは、容易に理解できるであろう。5人で守る3-2ゾーンは、オフenseチームにゴール周辺のスペースを与えないことによって大変有効に機能する戦術であったと考えられる。

2. コートのサイズからみた有効性

ゾーンディフェンスは、自分の守るべき特定の地域を味方と協力しながら責任を持って守るディフェンス戦術であることから⁷⁶⁾、コートが狭けれ

ば狭いほど、プレイヤー一人あたりの担当地域が小さくなり、味方を助けやすくなるため、効果を発揮しやすくなる。昭和初年代においても、バスケットボール競技の指導書の中で、この戦術が「狭いコートに於て行はれる時に最も有効である⁷⁷⁾」、「狭いコートに於いては容易に威力を発揮する⁷⁸⁾」と紹介されている。この点に関してはアメリカのエヴァレットS.ディーンもゾーンディフェンスの長所として「狭いコートでは非常に有利である⁷⁹⁾」ことをあげている。

それでは、当時はどれほどのサイズのコートで試合が行われていたのだろうか。バスケットボールコートのサイズは、1917（大正6）年に発行された完訳のルールとしては日本初とされる⁸⁰⁾ 規則書『バスケット、ボール規定』において「競技場は障害物なき長方形の平面にして其面積最大限長90呎（27m43cm）幅50呎（15m24cm）とし最小限長60呎（18m28cm）幅35呎（10m66cm）とす⁸¹⁾」と規定され、1925（大正14）年に「最大限長さ94呎（28m65cm）、幅50呎（15m24cm）」⁸²⁾と拡大されるまで改定されなかった⁸³⁾。つまり1917（大正6）年からルール上は27m43cm×15m24cmのサイズのコートでゲームを行うことができた。しかし、当時のゲームはルールで規定されている最大限の大きさよりも狭いコートで行われた。

立大OBの中澤三郎によれば、1923（大正12）年頃の日本では「Y.M.C.A.の体育館が本邦唯一の代表的屋内コートとされていた⁸⁴⁾」。そして全日本選手権大会や極東大会予選は、東京YMCAの体育館で行われた⁸⁵⁾。上述したとおりこの体育館は、1923（大正12）年の関東大震災で崩壊したが、1927（昭和2）年には増築落成し⁸⁶⁾、それ以降の全日本選手権大会及び極東大会予選は再び東京YMCAの体育館で開催されるようになった⁸⁷⁾。東京YMCAの体育館について李は、次のように記述している⁸⁸⁾。

永く此競技を哺み育て、くれた基督教青年會（YMCA—引用者注）の體育館が昨年から復興して現在唯一の競技場となつてゐる、然

しこれは正規のコートとしては些か狭隘の感がある・・・中略・・・然し未だ今の日本ではこれ程のスペースと設備を有するところも他にない

実際のところ、当時東京YMCAの体育館に設置されたコートは「長さ70呎(21m33cm)、幅40呎(12m19cm)」⁸⁹⁾しかなく、現在用いられている28m×15m⁹⁰⁾のコートと比べるとかなり狭いものだった。したがって「元來青年館の体育館の如きコートはゾーン型に取つて有利」⁹¹⁾とされたように、東京YMCAの体育館のコートでは3-2ゾーンを用いたディフェンスが有効に機能していたものと考えられる。

東京YMCA以外のコートについてはどうであろうか。1926(大正15)年発行の指導書では「普通男子一般の爲めには長さ80呎(24m38cm)、巾40呎(12m19cm)が多く使はれ」⁹²⁾、「戸外に於ける男子の大人の選手権大會や其の他の多くのゲームの場合には普通長さ80呎(24m38cm)に幅40呎(12m19cm)の廣さのものが使用されてゐる」⁹³⁾とされている。実際に明治神宮競技大会で使用されたコートについて、1926(大正15)年発行の「ATHLETICS」で薬師寺は「本競技のコートに就いてであるが、極東選手権競技大會で80呎(24m38cm)の40呎(12m19cm)と言ふのが恒例となつて居る處から、従來は大體之を標準として來た」⁹⁴⁾と述べている。明治神宮競技大会は外苑競技場のアウトドアコートで行われていたが、このコートは極東大会にならって設計されており、東京YMCAの体育館と比べるとわずかに長いものの、横幅は変わらず、現在のコートよりも狭いものであった。牧山は3-2ゾーンが有効性を発揮した要因として当時のインドアコートが狭かったことをあげているが⁹⁵⁾、当時のバスケットボール競技の主な大会が開催されたコートは、インドア、アウトドアともに現在のものより狭く、3-2ゾーンを有効に機能させる要因の一つになった。

3. コート床面の滑りからみた有効性

当時のコートは、サイズのほかにも3-2ゾーンが有効に機能する特徴を有していた。当時のコートについて、1926(大正15)年発行の『バスケットボール』では「非常な勢で走りつゝある時急に停止せんとすると大層迂り易いものである。之はコートが屋内の板張であつても或は屋外の普通の土質であつても迂り易いものである」⁹⁶⁾としている。実際に東京YMCAの体育館で1923(大正12)年に開催された第3回全日本選手権大会兼極東大会予選において、東京YMCAチームは「床上を程よく滑つて飛び込み、或は他の選手に衝突しないで滑りを利用して突進する」⁹⁷⁾という、コートの滑りを利用したプレイを行っている。また当時、最も整備された土のコート⁹⁸⁾であった立大のアウトドアコートについて、立大OBの中澤は「足は猾つてスタートはつかないし肝心の所でストップは出來ず」⁹⁹⁾と回顧している。これらのことから、代表的なコートであった東京YMCAの体育館や立大のコートを含め、当時用いられていたコートはインドア、アウトドアともに滑りやすいものであったことがわかる。

このように足下が滑りやすいコートでは、マンツーマンディフェンスよりもゾーンディフェンスのほうが、有効に機能する。マンツーマンディフェンスがオフェンスの動きに合わせてコート全体を動き回らなければならないのに対し、ゾーンディフェンスでは、動く範囲が各自の担当地域に限られているためである。1-3-1ゾーンや3秒ルールを考案したことで知られているクレア・ビー¹⁰⁰⁾は、アメリカ・ブリストルにおけるゾーンディフェンスの初見について次のように述べている¹⁰¹⁾。

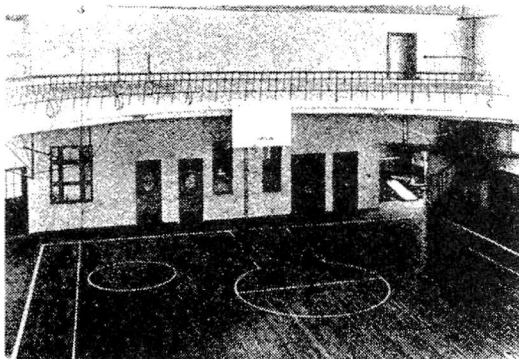
両方のチームはマンツーマンディフェンスを使用していたが、松のフロアからでる松脂のため、滑りやすく敵についていくことが困難であった。プレイヤーは足よりも、背中を何度も床にぶつけた。後半がスタートしたとき、ブリストルチームはマンツーマンディ

フェンスを使用しなかった。プレイヤーはシュートが打たれるまで、特定のゾーンから離れずにいた。

4. 東京YMCA体育館のギャラリー構造からみた有効性

上述したように当時のコートは狭く滑りやすいといった3-2ゾーンが有効に機能する特徴を有していたが、当時主要な大会で使用されることの多かった東京YMCAの体育館には、さらに3-2ゾーンが有効となりうる特徴があった。それは、コートの上部に設置されたギャラリーである。

写真から見てとれるように東京YMCAの体育館では、ギャラリーがバスケットボールコートのコーナー上部にまで張り出していた。そのためギャラリーとそれを支える鉄柱にシュートコースが塞がれるコーナーからは、シュートを打つことができなかつたのである。商大OBの植田義己は東京YMCAの体育館について「狭い体育館で、サイドからは鉄柱がじゃまでシュート出来なかつた」¹⁰²⁾と回顧している。一般的に3-2ゾーンの短所の一つとして、コーナーの防御が手薄になることがあげられるが¹⁰³⁾、東京YMCAの体育館は構造上、コーナーからシュートを打つことができなかつた。そのため、3-2ゾーンはより一層、有効に機能したものと考えられる。



写真：東京YMCA体育館のバスケットボールコート
(李想白：『指導籠球の理論と実際』、

春陽堂、1930、p.49)

IV. まとめ

本研究における検討の結果は、以下のように整理することができる。

1. 3-2ゾーン導入以前の日本では、各ポジションの役割が明確に区別されており、オフェンスは最大でも4人によって展開されていた。これに対して用いられたディフェンス戦術は、マンツーマンディフェンスであった。このディフェンスではオフェンスに参加する相手プレイヤーの人数に対応して、ディフェンスに参加するプレイヤーの人数が決められていたため、実際には4人以下のプレイヤーによってディフェンスが行われていたとみられる。
2. 1924（大正13）年頃、チームの強化を図った早大にコーチとして招聘されたF.H.ブラウンは、そこで3-2ゾーンを紹介した。F.H.ブラウンによって紹介された3-2ゾーンは、国内ではじめて採用された5人によるディフェンス戦術であったため「ファイブメン・ディフェンス」とよばれた。3-2ゾーンは、ファイブマン・ツーライン・ディフェンスが採用されるまでの間、国内で唯一の5人によるディフェンス戦術であった。
3. それまで4人でのディフェンスが行われていた日本において、5人のプレイヤーによる3-2ゾーンは、ゴール下のスペースを埋めることができたため、大変有効に機能した。また当時の日本におけるバスケットボールコートは狭く、滑りやすいものであった。さらに当時の主要な大会が数多く開催された東京YMCAの体育館は、コーナーからシュートが打てない構造であったことから、3-2ゾーンは有効な戦術として機能した。

以上の結果をふまえて今後は、3-2ゾーン導入を受けた国内におけるバスケットボール競技の戦術の変遷について研究を進め、日本におけるバスケットボール競技の戦術史を詳らかにしていきたい。

注および引用・参考文献

- 1) 1891年(明治24)にアメリカで誕生したバスケットボール競技は、1913(大正2)年頃日本に移入されたが、『バスケット、ボール規定』(極東体育協会編, 佐藤金一訳: 『バスケット、ボール規定』, 極東体育協会, 1917, 23P)が発行された1917(大正6)年以前の書籍に記されているルールは、コートが3区分されているもの(渡邊誠之: 『最新ボール遊戯法』, 研文館, 1912, p.192)や、1チームのプレイヤーの人数が5人と定まっていなかったもの(上平鹿之助: 『実験ボール遊戯30種』, 平本健康堂, 1910, pp.21-28)があるなど、統一されていなかった。このことから、本研究では、日本においてバスケットボール競技の統一ルールが発行された1917(大正6)年以降を研究の対象とし、この期間に国内で発行されたバスケットボール競技の指導書・雑誌及び規則書を史料として用いた。また1917(大正6)年以降の競技規則では、女子及び中等学校以下の少年と一般男性とは、競技時間が異なっており(極東体育協会編, 佐藤金一訳: 『バスケット、ボール規定』, 極東体育協会, 1918, p.11、大日本バスケットボール協会編: 『昭和8・9年度バスケットボール競技規則』, 大日本バスケットボール協会, 1933, p.10)、指導書においても両者の戦術が区別されている(李想白: 『指導籠球の理論と実際』 春陽堂, 1930, p.484、芽根貞元: 『ユーア・バスケットボール』, 大正洋行出版部, 1934, p.109)。そのため本研究では、女子及び中等学校以下を除く一般男性の戦術を対象とした。
- 2) スポーツ運動学において「戦術」とは、「行動の結果を考慮して、最も合目的に目的を達成する方法」(金子明友: 『運動学講義』, 大修館書店, 1990, p.275)を意味するものとされ、試合中に起こりうる具体的な行動に関わるという点で、戦略から区別される。さらに、嶋田は「戦略」を「敵の存在を前提として、その敵を打ち負かすことを目的とした総合的な目標、方針」、「戦術」を「その目標を達成するための具体的な手段、方法」(嶋田出雲: 『バスケットボール勝利への戦略・戦術』, 大修館書店, 1992, p.1)と定義している。以上に示した定義をふまえ、バスケットボール競技を対象とし、「戦術」と「戦略」の区別を重視する本研究では、「戦術」の語を「敵を打ち負かすという目的に向かい、試合中にとりうる具体的な手段・方法」と定義し、論を展開していくこととする。
- 3) 吉井四郎: 『バスケットボール指導全書1』, 大修館書店, 1986, p.238
- 4) 谷釜尋徳: 戦術史研究の今日的意義を考えるーバスケットボールの場合ー, 「ひすぼ」, No.81, スポーツ史学会, 2012, p.1
- 5) 大川信行: バスケットボールのゾーン・ディフェンス誕生までの経緯ーディフェンス・システムの変容からみてー, 「スポーツ史研究」, 第16号, スポーツ史学会, 2003, pp.13-14
- 6) 日本バスケットボール協会広報部編: 『バスケットボールの歩み』, 日本バスケットボール協会, 1981, p.43
- 7) 早稲田大学RDR倶楽部編: 『RDR60早稲田大学バスケットボール部60年史』, 早稲田大学RDR倶楽部, 1983, p.13
- 8) 同上書, p.13
- 9) 牧山圭秀: バスケットボールの技術史, 岸野雄三, 多和健雄編: 『スポーツの技術史』, 大修館書店, 1972, pp.374-400
- 10) 笈田欣治: 日本におけるバスケットボール変遷史からみた日本バスケットボールの今後の課題についてー考察, 「関西大学文学論集」, 第52巻, 第3号, 関西大学, 2003, pp.77-93
- 11) 前掲書5, pp.1-17
- 12) 同上書, pp.13-14
- 13) 当時のポジションについて荒木は「2人が

- 攻撃一攻撃をフォアウオード(ママ)と謂ふ一になり、2人が守備一守備をガードと謂ふ一になり、1人が中肩一中肩をセンターと謂ふ」(荒木直範：バスケットボール講話(1)、野口源三郎編：「ATHLETICS」,第1巻,第6号,1922,p.17)としている。
- 14) モーガン・ウットゥン著,水谷豊他訳：『バスケットボール勝利へのコーチング』,大修館書店,1994,p.84
- 15) 荒木直範：バスケットボール講話(4),野口源三郎編：「ATHLETICS」,第1巻,第9号,1922,pp.26-27
- 16) この各ポジションの主な役割は、その後も以下の指導書によって紹介された。
- ・外山慎作：『バスケットボール法大要』,外山慎作,1926,pp.9-12
 - ・三橋義雄：『バスケットボール』,広文堂,1926,pp.39-56
 - ・三本義雄：『最も要領を得たるバスケットボール階段的指導法と最新規則の解説』,木下製作所出版部,1926,pp.144-149
 - ・薬師寺尊正：バスケットボール,アルス文化大講座,第4巻,アルス,1927,pp.15-16
 - ・小瀬峰洋：『籠球競技』,教文書院,1929,p.3
 - ・藤山快隆：『バスケットボール』,目黒書店,1929,pp.3-4
 - ・玉文社編集部：『スポーツ百科知識』,玉文社,1930,pp.311-316
 - ・東京朝日新聞社運動部小高吉三郎編：『ホッケー、ラグビー、蹴球、籠球、排球』,東京朝日新聞発行所,1930,pp.184-185
- 17) 前掲書15,p.27
- 18) 三本義雄：『最も要領を得たるバスケットボール階段的指導法と最新規則の解説』,木下製作所出版部,1926,pp.149-150
このほかにも、1926(大正15)年に発行された指導書の中でガードの攻撃について「ガードは防禦が本務である。然し、いざとなつた場合にはオーン、コート(ママ)に進撃して好機会さへあつたならば、フォアワード(ママ)やセンターの力を俟つまでもなく、自らシュートして得点するだけの技倆と自信とを養つて置かねばならぬ」(外山慎作：『バスケットボール法大要』,外山慎作,1926,p.23)、「ガードする事がガードの重大なる任務であるがガードは更に進んで味方がボールを所有したならば稍前進して之を受け又之を投げ等して味方の結合を圖り又機を見て逸早く突進して自らシュートして得点する事に務めなければならぬ」(三橋義雄：『バスケットボール』,広文堂,1926,p.48)と述べられている。
- 19) 小瀬峰洋：『籠球競技』,教文書院,1929,p.87
- 20) 内務省衛生局編：『第2回明治神宮競技大会報告書』,内務省衛生局,1926,pp.413-414
- 21) 同上書,p.414
- 22) 三橋義雄：『バスケットボール』,広文堂,1926,p.117
- 23) 荒木直範：バスケットボール講話(9),野口源三郎編：「ATHLETICS」,第2巻,第5号,1923,p.64
- 24) 鈴木重武：『籠球コーチ』,矢来書房,1928,p.46
- 25) 前掲書19,p.193
- 26) 同時期に発行された指導書では他にも「ボールが味方のチームがボールを投げ入れるバスケットの附近に於て味方の所有となつて味方の競技者がゴールに向つてボールをシュートしつゝある時には1人のガードは其の場所に止まつて大勢を觀察し相手の攻撃に備へねばならぬ」(前掲書22,p.51)、「場合によつては攻撃の任に方らねばならぬが、大抵の場合1人は守備専任である」(藤山快隆：『バスケットボール』,目黒書店,1929,p.7)と記述された。
- 27) 廣瀬謙三：籠球の発達を省みて,妹尾堅吉編：『籠球』,第3号,1932,p.69

- 28) 東京体育科学研究会編著：『体育人名辞典』，逍遙書院，1970，p.283
1930（昭和5）年に発行された李の著書『指導籠球の理論と実際』は当時のコーチやプレイヤーたちのバイブルとして愛読された（関東大学バスケットボール連盟80年史編集委員会編：『関東大学バスケットボール連盟80年史』，関東大学バスケットボール連盟80年史編集委員会，2005，p.138）。また、李は全国を技術指導のため東奔西走し、さらにはコーチとして早大を1932（昭和7）年と1934（昭和9）年の2回に亘り全日本選手権大会に優勝させたことにより、当時の日本には李の理論が広まっていった（富田毅郎：李想白を語る，早稲田大学RDR倶楽部編：『RDR60早稲田大学バスケットボール部60年史』，早稲田大学RDR倶楽部，1983，p.170）。
- 29) 李想白：日本籠球界の回顧，太田茂編：『運動界』，第10巻，第4号，運動界社，1929，p.83
- 30) 鈴木重武：防禦法の研究，太田茂編：『運動界』，第7号，第12号，運動界社，1926，p.22
- 31) 前掲書22，p.207
- 32) 前掲書18，p.192
- 33) 大川によれば、アメリカでは1897（明治30）年頃を境に、ディフェンス専門であったランニング・ガードが攻撃に参加するようになり、攻防の展開が4対4となった（大川信行：バスケットボールにおけるロングパス・ファストブレイクの変遷について，『北陸体育学会紀要』，第41号，北陸体育学会，2005，p.61）。
- 34) 前掲書29，p.81
- 35) 田中寛次郎：我籠球部の生ひ立・商大の巻，薬師寺尊正編：『ATHLETICS』，第9巻，第1号，大日本体育協会，1931，p.137
- 36) 前掲書29，p.81
- 37) 富田毅郎他：座談会 協会設立以前のバスケットボール，日本バスケットボール協会広報部会編：『バスケットボールの歩み』，日本バスケットボール協会，1981，p.52
- 38) 富田毅郎：早慶が手を携えて，慶應義塾バスケットボール三田会編：『慶應義塾体育会バスケットボール部50年史』，慶應義塾バスケットボール三田会，1980，p.18
- 39) 薬師寺尊正編：『ATHLETICS』，第8巻，第6号，大日本体育協会，1930，p.94
- 40) 前掲書6，p.613
- 41) このことに関連する史料として、以下のものがあげられる。
・荒木直範：バスケットバレーボール大会印象記，野口源三郎編：『ATHLETICS』，第1巻，第5号，大日本体育協会，1922，pp.35-37
・西村正次：バスケットボール代表権は東京青年会組に帰す，野口源三郎編：『ATHLETICS』，第2巻，第4号，大日本体育協会，1923，pp.132-139
・前掲書6，p.614
- 42) このことに関連する史料として、以下のものがあげられる。
・鈴木兼吉：『大正10年度運動年鑑』，朝日新聞社，1921，p.403
・鈴木兼吉：『大正12年度運動年鑑』，朝日新聞社，1923，pp.277-278
- 43) 李想白：『指導籠球の理論と実際』，春陽堂，1930，p.21
- 44) 同上書，此書を
- 45) 浅野延秋：我籠球部の生ひ立・早大の巻，薬師寺尊正編：『ATHLETICS』，第9巻，第1号，大日本体育協会，1931，p.134
- 46) 同上書，p.134
- 47) 当時の指導書や雑誌では、5人でのディフェンスを英語では「five man defense」（長田博：バスケットボール誌上コーチ，大日本体育学会編：『体育と競技』，第7巻，第8号，目黒書店，1928，p.70、バスケットボール研究会編：『籠球必携』，東京運動社，1928，p.12）と表記しているが、カタカナでは「ファ

- イブメン・ディフェンス」と表記しており、「ファイブマン・ディフェンス」と表記しているものは二つ（規則制定連合委員会編、薬師寺尊正訳：最新籃球競技規則（大正15年度）、一花健蔵：『大正15年度運動年鑑』、朝日新聞社、1926、p.122、前掲書22、pp.215-219）のみであった。
- 48) 前掲書29、p.82
- 49) 前掲書45、p.134
- 50) 錦紅野士：バスケット・ボール出場チームの特色と欠点、太田茂編：『運動界』、第6巻、第12号、運動界社、1925、pp.164-165
- 51) 前掲書37、p.53
- 52) 薬師寺尊正：バスケットボール・ゲームを観る（上）、薬師寺尊正編：『ATHLETICS』、第3巻、第2号、越山堂、1925、p.88
- 53) 前掲書50、p.164
- 54) 薬師寺尊正：バスケットボール・ゲームを観る（下）、薬師寺尊正編：『ATHLETICS』、第4巻、第1号、越山堂、1926、p.108
- 55) 錦紅野士：早大籠球部遠征記、太田茂編：『運動界』、第7巻、第3号、運動界社、1926、p.97
- 56) 前掲書45、p.134
- 57) 前掲書22、p.216
- 58) 浅野延秋：バスケットボールを語る、青島文雄編：『ATHLETICS』、第10巻、第4号、大日本体育協会、1932、p.110
- 59) 前掲書37、p.57
- 60) 3-2ゾーンの短所として「コーナーの防御が手薄になる」（日本バスケットボール協会編：『バスケットボール指導教本』、大修館書店、2002、p.269）ことがあげられる。
- 61) 前掲書5、p.13
- 62) このことに関連する史料として、以下のものがあげられる。
- ・前掲書22、pp.218-219
 - ・鈴木重武：防禦法の研究、太田茂編：『運動界』、第8巻、第2号、運動界社、1927、pp.37-38
 - ・薬師寺尊正：バスケットボール、北原鐵雄編：『アルス運動大講座』、第5巻、アルス、1927、pp.50-51
 - ・藤山快隆：『バスケットボール』、目黒書店、1929、pp.252
 - ・大日本球技研究会編：『籠球研究』、一成社、1934、pp.220-221
- 63) 薬師寺尊正：バスケットボール、北原鐵雄編：『アルス運動大講座』、第5巻、アルス、1927、pp.49-50
- 64) 鈴木重武：防禦法の研究、太田茂編：『運動界』、第8巻、第2号、運動界社、1927、pp.37-38
- 65) このことに関連する史料として、以下のものがあげられる。
- ・外山慎作：『バスケットボール法大要』、外山慎作、1926、71P
 - ・前掲書22、358P
 - ・前掲書18、307P
 - ・前掲書24、260P
 - ・バスケットボール研究会編：『籠球必携』、東京運動社、1928、34P
 - ・前掲書19、212P
 - ・安川伊三：『籠球競技法』、目黒書店、1929、416P
 - ・藤山快隆：『バスケットボール』、目黒書店、1929、282P
 - ・朝日新聞社編：『運動年鑑』、朝日新聞社、1916～
 - ・太田茂編：『運動界』、運動界社、1920～
 - ・野口源三郎編：『ATHLETICS』、大日本体育協会、1922～
 - ・体育学会編：『体育と競技』、体育学会、1922～
 - ・薬師寺尊正：バスケットボール、『アルス文化大講座』、第4巻、アルス、1927、48P
 - ・薬師寺尊正：バスケットボール、北原鐵雄編：『アルス運動大講座』、アルス、1927～
- 66) 前掲書29、p.83

- 67) このことに関連する史料として、以下のものがあげられる。
- ・鈴木重武：防禦法の研究，太田茂編：「運動界」，第8巻，第1号，運動界社，1927，p.27
 - ・前掲書63，pp.48-49
 - ・バスケットボール研究会編：『籠球必携』，東京運動社，1928，p.12
 - ・藤山快隆：『バスケットボール』，目黒書店，1929，pp.252-254
- 68) 外山慎作：『バスケットボール法大要』，外山慎作，1926，p.55
- 69) 同上書，p.55
- 70) 同上書，p.55
- 71) 前掲書18，pp.191-192
- 72) 薬師寺尊正：商大覇権を握る，薬師寺尊正編：「ATHLETICS」，第5巻，第1号，大日本体育協会，1927，p.96
- 73) アドルフF.ラップ：ディフェンスの7原則，ジェリー・クロウゼ編，水谷豊他訳：『バスケットボール・コーチング・バイブル』，大修館書店，1997，p.415
- 74) 同上書，p.416
- 75) 同上書，pp.416-417
- 76) 日本バスケットボール協会編：『バスケットボール指導教本』，大修館書店，2002，p.268
- 77) 安川伊三：『籠球競技法』，目黒書店，1929，p.249
- 78) 前掲書43，p.610
- 79) エヴァレットS.ディー：インディアナ・バスケットボール(3)，松本幸雄編：「籠球研究」，第10号，松本幸雄，1936，p.11
- 80) 兵庫県バスケットボール協会50年史編集委員会編：『先賢の跫音 兵庫県バスケットボール協会50年史』，兵庫県バスケットボール協会，1985，p.39
- 81) 極東体育協会編，佐藤金一訳：『バスケット、ボール規定』，極東体育協会，1917，p.1
- 82) 規則制定連合委員編，薬師寺尊正訳：バスケット・ボール規則(1925)，朝日新聞社編：『朝日壽寶津運動記録大正14年度』，朝日新聞社，1925，p.428
- 83) この間のコートサイズに関する規定については及川(及川佑介：昭和初期における我が国バスケットボールの競技力向上過程に関する研究—松本幸雄と『籠球研究』(昭和9～10)を中心として—，「国士舘大学博士論文」，国士舘大学，2009，pp.78-79)が詳細にまとめている。
- 84) 中澤三郎：屋外籠球時代，山田和夫編：『籠球』，立教大学籠球部，1931，p.9
- 85) 廣瀬謙三：籠球選手権大会，太田茂編：「運動界」，第4巻，第4号，運動界社，1923，p.104
- 86) 前掲書6，p.583
- 87) 前掲書6，pp.615-617
- 88) 李想白：バスケットボール旅行を終へて，太田茂編：「運動界」，第9巻，第5号，運動界社，1928，p.18
- 89) 前掲書6，p.583
- 90) 日本バスケットボール協会審判・規則部編：『2011～バスケットボール競技規則』，日本バスケットボール協会，2011，p.11
- 91) 黒澤威夫：全日本男子総合選手権大会第2日，妹尾堅吉編：「籠球」，No.1，大日本バスケットボール協会，1931，pp.33-34
- 92) 前掲書18，p.11
- 93) 前掲書22，p.7
- 94) 薬師寺尊正：神宮本競技バスケットボール・ゲーム私見，薬師寺尊正編：「ATHLETICS」，第4巻，第12号，大日本体育協会，1926，p.82
- 95) 前掲書9，p.374
- 96) 前掲書22，p.150
- 97) 廣瀬謙三：籠球選手権大会，太田茂編：「運動界」，第4巻，第4号，運動界社，1923，p.107
- 98) 薬師寺尊正：八年前の話，山田和夫編：『籠球』，立教大学籠球部，1931，p.42
- 99) 前掲書84，p.10

- 100) クレア・ビー：教えるということ，ジェリー・クロウゼ編，水谷豊他訳：『バスケットボール・コーチング・バイブル』，大修館書店，1997，p.25
- 101) Clair Bee：『ZONE DEFENSE AND ATTACK』，NEW YORK，A.S. BARNES AND COMPANY，1942，p.3
- 102) 植田義己：東京商大（現一ツ橋大）OB植田義己さんを訪ねて，慶應義塾バスケットボール三田会編：『慶應義塾体育会バスケットボール部50年史』，慶應義塾バスケットボール三田会，1980，p.63
- 103) 前掲書76，p.269